



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



Extensive

ReadingのためのMotivationに関する若干の問題について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武本, 昌三 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3213

Extensive Reading のための Motivation に 関する若干の問題について

武 本 昌 三

Some Remarks on Motivating Extensive Reading for the Japanese Learner of English

Shozo Takemoto

Abstract

The development of a habit of reading English extensively and comprehensively for all students of English may well be one of the most important objectives of the English class at Japanese schools. Among Japanese teachers of English, however, the belief was once common, and possibly still lingers, that proficiency in reading is synonymous with the ability to read aloud and to translate word for word. Where this view prevails, the teacher feels bound to train all his students in the art of oral reading and of translation. The purpose of reading may, in consequence, degenerate into the mere ability to convert the printed signs into sounds with little, if any, understanding of the content of the reading material. Proficiency in reading, I presume, should be considered as transferring the idea from a printed page into our mind without consciousness of the language barrier. Reading as an end in English learning may thus be confined to extensive reading rather than to intensive reading. It is the purpose of this paper, therefore, to discuss the principles for motivating extensive reading and the most pertinent factors concerning ways in which the reading of the Japanese learner may be bettered.

Order of Discussion

1. Introduction	779
2. Appropriateness of Reading Materials	781
3. Cultural Backgrounds for the Materials	783
4. Developing Reading Skills	787
A. Comprehension of Word Meanings	787
B. Comprehension of Sentences and Paragraphs	790
5. Concluding Remarks	796

1. 緒 言

19世紀末頃から、外国語学習を能率化しようとする試みは、いろいろな modern method として示されて来た。しかしどんなにすぐれた method を用いたとしても、学習者の心理を無視しては決して効果的な学習結果は得られない。諺にもあるように、“One man can lead a horse to the water, but twenty cannot make him drink.” なのである。

Motivation は現代心理学の最も重要な概念の一つであると言われているが、英語学習においても特にこの motivation の重要性を強調しないものはない。一般に英語を学び始める頃の学習者は、殆んど一様に英語に対して強い関心をもってのぞむのであるが、半年、1年と経過していくうちに、学習者の間にはだんだんと学力の差があらわれ始める。その原因としては、英語教授法の mannerism, 教材の複雑化或いは無味乾燥といったようないろいろの要因が考えられるとしても、根本的には英語の習得課程における学習者の主体的要求と教授法との「ずれ」がその主な原因になっているのではないだろうか。その結果、かつての欧米でラテン語が或程度そうであったように、英語の学習はただ忍耐力を養うためだけの試練の場にもなりかねず、「英語がわからないから面白くない、面白くないからますます英語がわからない」という悪循環が始まったりするのである³⁾。

このような場合、「英語をわからせる」ということがしばしば第一義的に考えられ、そのために面白く、わかり易く教える工夫がいろいろと為されて来た。この種の工夫の大切であることは勿論否定出来るものではないが、それと同時に、否それ以上に、もっと根本にある学習者の主体的要求を引き出す、つまり学習意欲を起こさせることが考えられなければならない⁴⁾、これがとりもなおさず motivation の問題である。

Motivation は内的なものと外的なものに分けられるのが普通である。すなわち行動そのもの自体に関心をもって行動するようにすることが内的なものであり、外的なものとは、例えば、賞品や名声を得るために一定の行動をするというように、目的が行動の外にある場合である⁵⁾。

そこで英語学習における motivation を考えてみる場合、純粋に学習しようとする意志が刺激となることが最も大切であることはいうまでもない。真の学習は motivation が起されている程度において効果を有するのであって、外在的な興味はその時は面白くとも、英語そのものの学習にはあまり有益ではないことが実験的にも示されている⁶⁾。

それではこの英語学習の中で特に reading だけを取上げてみる場合、それに対する motivation にはどのようなものがあるだろうか、Hook はそれを次のように要約している⁷⁾。

- a) Each student should understand what reading can do for him.
- b) Each student should know how well he reads.
- c) Each student should know that his reading can be improved.
- d) Each student should be kept aware of his progress.
- e) Reading materials should be appropriate.
- f) The classroom atmosphere should be pleasant.

これはこのまま日本における外国語として英語の extensive reading 指導に際しても重点を移し変えてあてはめることが出来ると思われる。ただ外国語の場合、このほかに reading 用教材の社会的文化的背景について相当の知識を持つということが、motivation のためには殆ん

ど必須の要件になってくるであろう。本稿ではこれらの中、特に extensive reading に関して重要であると思われるものを重点的に取上げ、これから検討を加えてみることにしたい。それらは次の3点である。

- A. 適切な reading material の準備
- B. 教材の文化的背景に関する理解
- C. Reading skill に関する予備知識

2. 適切な Reading Material の準備

ここで取り上げる extensive reading のための教材としては、中学や高校の Reader のようなものは勿論考えていない。それらは英語の教材として必要な諸条件を出来るだけ取り入れるような配慮の下に編纂されているが、学習者の学力より一段低いレベルの Reader を使用する場合を除いて、extensive reading のためには不向きである。ここでは、高校等においては Reader よりもいわゆる副読本を、又比較的教材の選択範囲がひろく自由な大学レベルの教材を念頭においていくことにしたい。

Extensive reading のための適切な教材ということを考える場合、先ず問題にしなければならないのはその難易であろう。一般に教材の難易の問題は、学習効果と常に密接な関連性を持つ。教材があまりむづかし過ぎる場合には、学習者は多くの時間と労力を消費する割合には得るところが少なく、又反対に、あまり易し過ぎる場合においても、期待していた程の効果は得られ難い。Ausubel は更にこの問題を心理学的な面から次のように述べている。

Task difficulty also affects learning efficiency in other ways than by influencing amount and rate of learning relative to the effort expended. Excessively difficult material makes for an undesirably large number of initial errors and misconception that have to be unlearned; interferences with necessary intra-task mastery and consolidation in sequential learning programs; and depresses the learner's self-confidence, lower his motivations, increases his anxiety, and promotes task avoidance. Inappropriately easy material, on the other hand, fails to stimulate and challenge the learner adequately, fostering boredom and disinterest⁶⁾.

しかし extensive reading のための教材としては、原則的には易しいものでなければならぬであろう。この場合よく言われるように、学習者の持つ言語的条件と、精神年齢から求めているものとの間のギャップが問題になることが予想される。しかし易しい教材乃至は易し過ぎる教材であっても、それを数多く、速く読ませる練習を段階的に積み重ねていけば、その心理的効果と相俟って結局はむづかしい英文の理解ということに対しても short cut になるのではないかと考えられないこともない。ともかく extensive reading を指導する場合の教材はむ

づかしいものは不向きである。それでは教材の選択の際、その難易の程度はどのようにして判断すればよいか、若し客観的な基準を設定してこれを決めるということになれば決して容易なことではない。

その際先ず考えられることは、学習者の持つ vocabulary がどの程度のものであるかを知ることであり、次に選択の対象となっている教材自体の持つ vocabulary の程度を知ることであろう。教材を語学面だけから眺める場合には、この2つがその難易を判断する殆んど決定的な factor になると思われる。

この中、前者については、東京都立九段高校で行なわれた次のような語い調査の方法が報告されている⁷⁾。

(Thorndike の表による 1, 2, 3 年生の語い調査)

Thorndike の表の中から 1000 語台、2000 語台、3000 語台、4000 語台、5000 語台、ときざんで下表のようにそれぞれ 20 語づつを全く機械的に pick up する。

- | | | | | | |
|---|----------------|----------------|------------------|-------------------|-----------------|
| ① | 1) add | 2) begin | 3) burn | 4) dark | 5) fall |
| | 6) hour | 7) late | 8) wind | 9) reach | 10) son |
| | 11) beast | 12) chief | 13) easy | 14) enter | 15) fact |
| | 16) labo (u) r | 17) narrow | 18) pain | 19) pull | 20) valley |
| ② | 1) apply | 2) breathe | 3) consent | 4) danger | 5) fence |
| | 6) gay | 7) handle | 8) include | 9) lead | 10) melt |
| | 11) pail | 12) observe | 13) particular | 14) quality | 15) range |
| | 16) satisfy | 17) scatter | 18) splendid | 19) unless | 20) wealth |
| ③ | 1) altogether | 2) bathe | 3) canal | 4) closet | 5) enclose |
| | 6) foundation | 7) hare | 8) ignorant | 9) ladder | 10) magnificent |
| | 11) package | 12) occupation | 13) perish | 14) prosperous | 15) shallow |
| | 16) spear | 17) tame | 18) wrath | 19) vein | 20) zeal |
| ④ | 1) agony | 2) bother | 3) cargo | 4) convention | 5) desperate |
| | 6) envelope | 7) fertile | 8) gild | 9) grin | 10) halt |
| | 11) lump | 12) moist | 13) nevertheless | 14) plough (plow) | 15) resolute |
| | 16) salute | 17) substitute | 18) twine | 19) visible | 20) yawn |
| ⑤ | 1) abolish | 2) avenge | 3) bait | 4) confident | 5) crouch |
| | 6) disgust | 7) feat | 8) enthusiasm | 9) gait | 10) grudge |
| | 11) lag | 12) namely | 13) peninsula | 14) radiant | 15) scour |
| | 16) steadfast | 17) tedious | 18) treaty | 19) vivid | 20) wedge |

これをテストとしてやらせてみた結果、20 点満点として、① (1000 語台) は、3 年生が 17 点、2 年生が 15 点、1 年生が 10 点、② (2000 語台) は、3 年生が 9 点、2 年生 4.5 点、1 年生 2.2 点、③ (3000 語台) は、3 年生 5.5 点、2 年生 2.8 点、1 年生が 1.6 点、④ (4000 語台) は 3 年生 2.6 点、2 年生 1.5 点、1 年生 0.3 点、⑤ (5000 語台) は 3 年生 1.3 点、2 年生 0.6 点、1 年生 0 点というような成績を示したという。

このような語いテストによって正確な vocabulary をうかがい知ることが出来るわけでは

勿論ないが、大体的見当をつけることは可能であるし、教材の選択のためのテストであれば、この程度のもので充分応用出来ると考えられる。

一方、教材自体が持つ vocabulary についても検討してみる必要があるが、これについては Harris が次のような方法を述べている。

A good sample of the total vocabulary of a book can be easily selected. In a book of 145 pages, a twenty-word sample can be taken by taking one word from every seventh page. In order to make it a random, unbiased sample it is desirable to decide in advance to choose each word from a particular position on the page. For example, one twenty-word sample can be taken by choosing the third word on the second line of pages 1, 8, 15, and so on. Equivalent samples can be chosen by starting on page 2, or by taking the word from a different line. No word that appears in the predetermined position should be left out because it seems unsuitable, except proper names, for then the sample would no longer be a random sample. A twenty-word sample is long enough for most teacher purposes⁸⁾.

この方法によって得られる sample は例えば次のようなものになるが、若し学習者がこれらの表の単語の中、3つ以上わからない単語があれば、その text は教材としてはその学習者に不適當であると Harris は言う⁹⁾。これは extensive reading の material 選択の場合にも、situation に応じて有効に応用出来る方法であると言えよう。

(sample の中、Grade 1 から Grade 5 までのもの)

Grade 1	Grade 2	Grade 3	Grade 4	Grade 5
another	clang	cheek	addition	accomplish
cry	fruit	reason	blizzard	commotion
hopped	quick	plain	compound	decorate
gate	teach	freeze	embrace	essential
snow	sound	knife	groove	marvelous
next	music	inch	introduce	grateful
bunny	often	moment	magic	population
thought	straight	president	nonsense	remarkable
well	dark	shovel	permanent	suggestion
running	cannot	whale	scratch	territory

この教材の難易の判断を誤れば、extensive reading を目標としていても、いつの間にか intensive reading に似て来て結局どっちつかずになり易い。この意味でも教材の選択の中では難易の判断が key point であるといえるであろう。適切な教材を選択するとすれば勿論このほかにも、言語学的或いは文学的な内容面からの検討が伴わなければならないのであるが、これらの点についてはここではふれずに次へ進みたい。

3. 教材の文化的背景に関する理解

Extensive reading そのものが、少なくとも英語学習の初級者向きではない以上、その

reading material の内容は、当然のことながらかなり高度であることも予想されなければならない。小説・劇などの文学作品、思索的な論文・随筆、歴史的なものなど、その多くのものが教材の背景となっている作者の生涯や思想、その作品が書かれた、或いは取り上げている、時代や場所の風物、生活・習慣等の文化背景に関する知識を持つことなしには十分な理解は望めない。語学的乃至は狭義の文法的知識の有無については殊更に強い関心が持たれがちな反面、本来もっとも重要でありながら軽視されて来たと思われるものは、英文の背後にある、政治・歴史・社会・文学・民族性等を全体として包含する限りない連想への関心ではないであろうか。英語指導がともすると無味乾燥に流れがちな一つの要因は、このような文化的背景についての知識に支えられない reading の継続が、学習能力に対する自信の欠如を招き、且つ motivation を阻害するからであると思われるのである。

今こころみに、次のような文章を考えてみることにしよう。

An eighteenth century Englishman would be right at home in a Tokyo coffee shop. [William Clark's Spoken American English p. 13]

この文章のポイントは would にあることは一読すればすぐわかることであるが、しかし、この would の用法を文法的に理解し得たとしても、それだけでこの文の真の意味を理解することは出来ない。「一体何故 18 世紀の英国人であって、19 世紀や 17 世紀であってはいけないのか？」という疑問がこの文章の要点である筈である。ここに至って学習者の眼は当然 18 世紀の英国の社会に向けられなければならない。

「17, 18 世紀を経て発達し来た工場制手工業が 18 世紀後半に至って産業革命にまで進展したことは周知の通りで、その結果は中世封建社会から自由と個人の尊厳との意識にめざめた市民社会の成立へと発展した。政治に対する関心も熱狂的なそれとなり、政治屋達はめいめい行きつけのコーヒー店へ集まって政論を事とした。時にそれが深夜にまで及んだのである。当時ロンドンにたちまち 2000 に及ぶコーヒー店が出来上ったといわれ、そこでコーヒーを飲むのは二の次で、しきりに政治その他を喧喧諤諤と論じたとあれば、18 世紀の英国人ならずとも外国には何処にも見られないという評判の高いオシボリまでサービスしてくれ、おまけにあらゆる種類の音楽まで聞かせてくれる日本のコーヒー店が最上の慰安と安らぎを与えてくれるものとする」¹⁰⁾ ことは容易に想像されるのである。

次は詩の例である。簡単な詩でむづかしい単語もなく、語学的に意味をとるだけであるならば中学生にも充分わかる。しかし、何故そうであるのかということがわからなければ詩のリズムの美しさを鑑賞するどころではなくなってしまう。

Bed in Summer

— R. L. Stevenson —

In winter I get up at night

And dress by yellow candle-light.
 In summer, quite the other way,
 I have to go to bed by day.

I have to go to bed and see
 The birds still hopping on the tree,
 Or hear the grown-up people's feet
 Still going past me in the street.

And does it not seem hard to you,
 When all the sky is clear and blue,
 And I should like so much to play,
 To have to go to bed by day?

この詩では Stevenson の生涯や思想、或いはこの詩へ書かれた動機等を知るよりも前に、何よりも先ず、Stevenson の生国 Scotland が北国であるために、冬は昼が非常に短かく、反対に夏は昼が非常に長く、日没後も暗くはならないで夕暮の状態が夜 11 時頃までも続くのだという予備知識があつてはじめて、この詩の真の意味や美しさが理解出来るのである。

このような例は枚挙にいとまがない。日本でわれわれが見たり聞いたり経験したりするものとは異なつた事物、風俗、生活習慣、思想等が reading material の内容になっているのが普通である以上、程度の差こそあつても、この教材の文化的背景の問題は reading に常につきまとう。厳密な意味では、例えば、house とか garden とかいうようなごく簡単な単語を考える場合にも、これらを簡単に、house=家、garden=庭、としてしまうことは危険が伴うと言わざるを得ない。ベッドで寝る以外は靴をはいたまま部屋の中を歩き廻れる欧米のレンガ造りの家は、タタミ、フスマの日本的木造家屋とは、家は家であっても内容はまるで違ふし、garden も日本式の庭を想像したら全く見当違いになるのである。

もともと、reading そのものが語学的な能力の向上と併せて、社会的文化的知識の涵養を目指さなければならない性質のものであるから、この両者は互いに相関関係にあらねばならないのは当然である。そしてこの相関関係の中で、文化的背景に関する知識が語学能力の向上に先行しなければならない場合と併行する場合の二つがあるといえるであろう。今ここで取り上げた二つの例は、この中、前者に属するものになるであろうし、後者に属するものとしては、例えば、次のような文が考えられる。

In Twentieth-Century America, Puritanism is the dead hand of a very unpleasant past. There is no joy in it, no light, no progress or hope of progress. It lives in moldy laws and unreasoning, unfeeling conventions. But in the Seventeenth Century this was not so. The Puritans were the innovators. They stood for liberty of thought, for freedom of personal belief, for the right of individual judgment.

Against them were arrayed all the forces which the modern Puritans cherish as allies—the established order, the king, the courts, rural ignorance, and social conservatism. To be a Puritan was to combat all these reactionary forces. To champion the individual against Church and State. To pit the liberalism of the city against incurable mental stagnation of the countryside. To fight for self-government against the Divine Rights of Kings. Puritanism shortly became more illiberal than ever its opponents had been, but that's the way with all successful heresies. Its spirit at the beginning was that of violent revolt against the past¹¹).

語学的能力と教材の文化的背景に関する知識の向上——motivationはこの二つの相関関係が円滑に保持されることが期待されてはじめて学習者の中に育てられるものと考えられるであろう。このことは別の見方をすれば、教材内容の文化的背景に関する理解が深ければ深いほど reading は容易になり、ひいては語学力の向上にも資することを予想せしめる。従って reading ability の向上ということだけに主眼がおかれる場合は、学習者に与えられる reading material の内容は、学習者の連想を容易ならしめるもの乃至はその material の文化的背景に充分に通暁しているものを重点的にえらぶ配慮が為されなければならないことは自明の理である¹²。

このような意味から reading material として先ず考えられるのは、その背景が地域的には学習者にとって最も身近かな、例えば日本に関するものであり、時代的には学習者との時間的な距離の少ない現代的なものである。その一例として次のような Hearm の文を取り上げてみたい。

But gradually, after an hour passed in the quarter, the eye begins to recognize in a vague way some general plan in the construction of these light, queerly-gabled wooden houses, mostly unpainted, with their first stories all open to the street, and thin strips of roofing sloping above each shop-front, like awnings, back to the miniature balconies of paper-screened second stories. You begin to understand the common plan of the tiny shops, with their matted floors well raised above the street level, and the general perpendicular arrangement of sight-lettering, whether undulating on drapery or glimmering on gilded and lacquered signboards. You observe that the same rich dark blue which dominates in popular costume rules also in shop draperies, though there is a sprinkling of other tints, —bright blue and white and red (no greens or yellows). And then you note also that the dresses of the laborers are lettered with the same wonderful lettering as the shop draperies¹³).

このような文章の内容については一般に英米人より日本人の方が理解し易いのは当たり前である。日本人の学習者がこのような文章を読む場合には、自分の身の廻りの事物、自分自身の経験等による連想が強く働き、それが英文そのものの理解を助ける。われわれは通常、日本語を読むのであれば、わからない字、わからない語、或いはわからない句・文があったとしても、あまり意に介さず、すらすら読み進んでいく場合が多いが、それでいて、書かれてあるも

この内容を把握するのにあまり不自由を感じない。極端な場合、印刷の一部が不鮮明であったり、活字が脱落したりしていても、そこにあるべき語句がどのような意味内容を持ったものであるかを推測することは、そう困難ではないのである¹⁴⁾。英文の場合にも、特に今取り上げた例のような場合には、文章そのものの程度の差こそあれ、当然このことは当てはまらなければならない筈であろう。

普通、英文を読む場合、学習者の心理的負担は常に語学面と読む内容の背景に関する知識面との二通りに亘ることが考えられる。Extensive reading においては特にこの傾向は強い。しかしこの心理的負担は、そのどちらかの一方が軽減すればする程、reading に対する親しみと自信を倍加させるのに役立つ。それ故に extensive reading のための教材は、語学力のレベルがかなり高度のものになってからのことは別として、少なくとも初期の段階では、日本的なもの乃至は日本に関するものを選択する方が効果的であることは明らかである¹⁵⁾。

4. Reading skill に関する予備知識

「学問に王道なし」という言葉がある。Reading をマスターするにも王道はないであろう。しかしこのことは目標に到達する short cut がないことを意味するものではない。むしろ short cut の探究こそが英語教授法におけるさまざまな approach を生み出して来たと言えないであろうか。Extensive reading についても short cut の所在を示し、且つこれが available であることを知らしめることは、学習者の extensive reading に対する心理的負担を和らげるのみならず、motivation を高めるのにも役立つ筈である。この short cut のための reading skill にはいろいろなものが考えられるが、ここではその中最も基本的な単語の解理と文の理解について考察を進めて行きたい¹⁶⁾。

A. 単語の理解

Extensive reading とはただ単に、単語の継続的な認知を素早く行なうことを意味するものではない。それは単語の配列を一つの意味を持った idea として敏速に把握することであり、更にこれらの idea から思考課程の全体に通暁することを意味する。従って extensive reading の場合、単語の一つ一つを個別に意識するのではなくて、或るまとまった意味を持つ単語のグループをグループ毎に遅滞なく意識することが必要であるといえよう。しかしいづれにせよ、個々の単語についての知識を充分に持つことが不可欠の要件であり、この意味からも、英語指導における最も大きな関心事の一つは、単語の数をいかにしてふやすか、或いは、単語についての知識をいかにして深めるかという点にあるとも言えるであろう¹⁷⁾。これについてここでは次の2点を組み上げて考究してみたい。

a) Context による単語の理解

未知の単語が Context により推測出来る case は決して珍らしくはない。一般に注意深い

作家ならば文脈の中で重要な単語の意味がわかるような方法をいろいろ工夫して、読む者の心理的抵抗や誤解を少なくしようとするものだからである¹⁸⁾。例えばこれを日本文で示せば次のような文の場合である。

「文章の初心者には修辞学についての知識がないのが普通である。彼が受けた文章入門の勉強では、語句の効果的表現ということまではあつかわない。」

この例文で仮りに修辞学という言葉がわからないとしても、読む人が注意深く読み、文脈を見抜く力があれば「初心者」「知識がない」という言葉と、「文章入門の勉強」という言葉の間には密接な関係があることに気づくであろう。そしてこの関係に気がつくと、第2の文は第1の文の言いかえであろうと予想し、かくして修辞学というのは「語句の効果的な表現」ということに関聯があるだろうと推定出来るのである¹⁹⁾。このような文章は英文の場合、例えば次のような種類に分類される²⁰⁾。

1. Definition による場合

文中の重要な単語はしばしば次の例文のように定義として、或いは定義ふうにくり返して述べられる。

Being equipped with cilia—that is to say, with little movable hairlike appendages—they are capable of swimming.

この場合、cilia=little movable hairlike appendages であるからおよその見当はつく。

2. Parallelism による場合

文中の単語の意味が、その前後に所在する類似的な語句により推測される形である。

It was a *heterogeneous* group, a combination of ages, sexes, colors, creeds, and races.

3. Contrast による場合

Parallelism の応用形の一つと見てよいであろう。単語の意味は説明語句の逆の意味で推測される。

Unlike her *gregarious* parents, she preferred to be alone.

4. Elaboration による場合

文中の或る単語について、例を挙げたり注釈を加えたりしてその意味を布延説明する形をとる。

Contrary to popular opinion, however, the only instruments of which he was literally the originator were the *pusilogia* and the sector. The former, based upon his discovery that the pendulum is a regulatable and dependable timekeeper, was a machine for measuring the pulse beat.

5. 文全体の意味から推測出来る場合

文中に未知の単語があっても、残りの文全体の意味が把握出来れば、問題の単語の意味は論理的に決まってしまう。

The fact that he preyed upon small, defenseless animals makes the act more *despicable*.

b) Word analysis による単語の理解

ラテン語やギリシヤ語の知識が英語の単語の理解及び vocabulary の増大に非常に有用であることは周知の事実であるが、しかしこの二つの言葉の習得が英語をマスターするための必要条件では勿論ない。ただこの二つの言葉に由来する接頭辞や接尾辞の知識だけは extensive reading という段階に入る前に是非身につけておくべきであると思われる。その結果単語によってはたとえ未知のものであっても、例えば geology ならば、

$$\text{geology} \begin{cases} \text{geo}=\text{earth} \\ \text{logy}=\text{science or knowledge of} \end{cases}$$

と語源的に分析することによって意味を推測出来なければならない。

Stauffer の接頭辞に関する研究によれば、The Thorndike Teacher's Word Book に含まれている単語の中、24 パーセントまでが接頭辞のついたものであり、又同書の 2 万語の単語のうち、接頭辞を持つ単語の 82 パーセントまでが次の 15 箇の接頭辞を持つものであるという²¹⁾。

ab (from)	de (from)	in (into)	re (back)
ad (to)	dis (apart)	in (not)	sub (under)
be (by)	en (in)	pre (before)	un (not)
com (witn)	ex (out)	pro (in front of)	

これに似たものでは Brown と Wright の共同研究があるが、彼等は普通の desk dictionary では約 14,000 語、又最もくわしい大辞典では約 10 万語が次の 14 箇の master word の少くとも一つ以上の element を含んでいるという。この element とは 14 箇の master word が含む二つのギリシヤ語系語根、12 箇のラテン語系語根、それに 20 箇の接頭辞のことである²²⁾。

Master-words	Prefix	Common meaning	Root	Common meaning
Precept	pre-	(before)	capere	(take, seize)
Detain	de-	(away, from)	tenere	(hold, have)
Intermittent	inter-	(between)	mittere	(send)
Offer	ob-	(against)	ferre	(bear, carry)
Insist	in-	(into)	stare	(stand)
Monograph	mono-	(alone, one)	graphein	(write)
Epilogue	epi-	(upon)	legein	(say, study of)
Aspect	ad-	(to, towards)	specere	(see)

<i>Master-words</i>	<i>prefix</i>	<i>Common meaning</i>	<i>Root</i>	<i>Common meaning</i>
Uncomplicated	un-	(not)	plicare	(hold)
Nonextended	com-	(together, with)	tendere	(stretch)
	non-	(not)		
Reproduction	ex-	(out of)	ducere	(lead)
	re-	(back, again)		
Indisposed	pro-	(forward)	ponere	(put, place)
	in-	(not)		
Oversufficient	dis-	(apart from)	facere	(make, do)
	over-	(above)		
Mistranscribe	sub-	(under)	scribere	(write)
	mis-	(wrong)		
	trans-	(across, beyond)		

このような element を手掛りとする word analysis の方法は、前述の如く学習者には extensive receding の段階に入る前に充分に理解させておかねばならない。未知の単語を辞書により丹念に調べることももとより大切であるが、extensive reading の場合には辞書に頼るよりもこのような方法による単語理解の方向により多く関心が向けられるべきであるかも知れない。McKee もこのような word analysis の方法を早く身につける必要性を説いて次のように述べている。

……any one of certain structural elements which need to be taught—a suffix such as *ed, es, ing* added to a base word to make a variant—will be taught as soon as the lists of words already learned by sights includes two or three words which contain that element and which, therefore, can be used for introducing the element²³⁾.

B. 文 の 理 解

学校で reading を取り扱う場合、一般に中学のレベルより大学のレベルに至るまで、学習者に対しては英文の一つ一つを読んでは訳すという作業のくり返しを要求している場合が多い。その結果 Jespersen の言うように、He (the learner) is too apt to get the impression that language means a collection of words which are isolated and independent, and that there must be a corresponding word in his native tongue for each new foreign word that he learns²⁴⁾. という風になりがちである。そして無理をしながら英文をすべて日本語に置きかえることによって英文を読んだことにしているのであるが、これは reading の本来の姿とは異質のものである。悪習と言わざるを得ないであろう。教室での訳読は原文を正しく理解しているかどうかをためすための一手段にすぎず、訳読主義的な読み方の習慣は、extensive reading の場合には特に、障害であるとさえ言えると思う。

従来訳読主義の場合には、例えば学習者は、英文の一つの paragraph を読み終えた時点

で、その英文を理解しているのではなく、一度読み終えた英文を、また最初に戻って日本語に置きかえ始めた時に、その英文を理解し始めることが多い。つまり最初に読むのは reading ではなく、ただ音声を発しているだけなのである。しかも、一字一句の訳語にこだわるあまり、個々の文を日本語に置きかえることが出来ても、paragraph 全体の大意はさっぱり掴めていないことが少なくない。英語教授のあり方がこのようなことのくり返しであるならば学習者は何年たっても英字新聞一つろくに読めないのは当たり前である。このようなことから extensive reading は英語教育全体の中で今後もっと強い関心が示されなければならない一つの課題であるといえよう。

Extensive reading において文全体の意味を素早く理解するためには、何よりも先ず、そこに含まれている main idea を掴むことが肝要である。しかしこの main idea を掴むためには、必ずしもその文全体を構成している単語をすべて理解していることを必要とはしない。これは前述の reading material の文化的背景にも関聯してくることはあるが、日本文の場合にあてはめて考えてみれば容易に理解出来る。

例えば今ここに少し文体は古いが、5・15 事件で亡くなった犬養毅が「怨」を説いている次のような文がある。

「吾十四歳にして父を喪ひしより困苦の中に修学し成長し、既にして世に出て政事に關係せしより長らく逆境に居り、世の寒苦辛酸を嘗め尽したるが故に、人に対する毎に、若し吾身此境遇に在らばと思ひやるが故に、未だ曾て僕婢などを叱罵したることあらず。吾子孫も亦此心を以て人に接せんことを望む。此心が即ち怨なり」²⁶⁾

これを読んで怨とは何であるかを理解するのに、文体の古さや、漢語調や、見なれない漢字の使用などがそう苦になることはないであろう。要するに、「自分は苦勞を重ねて来たから、他人に対する思いやりの気持を強く持つようになり、僕婢などを叱罵したことがない」というのであって、自分がどのような種類の苦勞をして来たかということは、ここでは重要ではない。(吾身此境遇に在らばと思ひやるが故に) 僕婢などを叱罵したことがない、というのがこの文の main idea であって、この場合の怨も、殆んどこれだけで言い尽くされているとも言えるのである。つまりこの文では、十分に理解していなければならない単語はいわば局限されているのであるが、英文の場合、学習者はこのような単語の重要性の比重に関係なく、未知の単語に出合う度毎にそこで立止って辞書を引くという一種の無駄をくり返しているのが普通である。Extensive reading は先ずこのような無駄を無くすことから出発しなければならない。

英文を速く読むということは、それだけ読んでいる英文の理解力が弱まることを意味しない。むしろその逆であって、speedy reading は speedy comprehension でなければならない筈のものである。それではそのためにどのような読み方をすればよいか、その方法について Stroud は、その著書 *Improving Reading Ability* の中で次のように suggest している²⁶⁾。

1. Try to get the central thought of the paragraph without careful reading of every word or even every sentence.

2. Examine paragraphs for the “tightness” of construction. If a paragraph represents a unit of thought, somewhere within it is a core or key sentence which expresses that thought. Some paragraphs are composed of a clearly stated topic sentence and tightly woven subordinate ideas; others are loosely constructed, using detail or illustration to supplement or expand the main idea.

3. In study-type reading it is often advisable to keep a pencil in hand; check an occasional phrase or sentence which expresses clearly the thought of the paragraph. This can be especially helpful in reviewing what you read. It also helps to keep your attention focused upon the main task of reading.

4. It is your responsibility to find the main idea in the paragraph. Here are suggestions which may help you:

a. Read carefully one or two paragraphs at the beginning of a selection you may be reading to learn what the writer is saying or the direction in which he is pointing his ideas.

b. As you continue to read, look for the topic sentence, usually at the beginning or end of the paragraph. If it's not there, read for the parts that contribute on the main idea.

c. Watch for a repetition of the main idea. Repetition is used to emphasize the importance of the reader's grasping the main idea.

d. Examine the author's summary and note how he ties his ideas together. If you've done a good job of reading, the author's summary should be the same as your own mental organization of the main ideas of the selection.

このような extensive reading の方法を習慣づけるためには、従来の訳読式教授法が不当であることは明白である。学習者に対しては全文を訳させたりすることの代りに、例えば英文を読み終えた時点において、その英文を見ることなく直ちにその内容を summarize させる、というような練習が効果的であろう。そしてその場合必要なことは、英文を読みながら summarize するために重要である語句をそうでないものから区別して素早く読み取ることである。それではここに言う「重要である語句」とはどのようなものをいうのであろうか。英文がその構造上、(1) 主要素 (Essential Element), (2) 従要素 (Subordinate Element) 及び (3) 遊離要素 (Absolute Element) の三つに分けられるとすれば、おのずからそれは主要素を意味する。すなわち、主要素の subject 及び predicate を文中で適確に捕えることが内容理解の重要な key となるのであって、他の二つの要素に属する、modifier, connective, parenthetica 等は主要素理解のための副次的あるいは補助的なものとして扱うのである。

例えば Hearn の焼津での思い出を書いた文の中に次のような一節がある。(すでに述べたように、日本的な題材を扱っている英文は、situation の類似性により、学習者の経験と想像力が内容理解を助けるという意味において、特に extensive reading の初歩の教材として適当で

ある。)

The big boats with holy texts at their prows are not the strangest objects on the beach./Even more remarkable are the bait-baskets of split bamboo—baskets six feet high and eighteen feet round, with one small hole in the dome-shaped top./Ranged along the sea-wall to dry, they might at some distance be mistaken for habitations or huts of some sort./Then you see great wooden anchors, shaped like plough-shares, and shod with metal; iron anchors, with four flukes; prodigious wooden mallets, used for driving stakes; and various other implements, still more unfamiliar of which you cannot even imagine the purpose²⁷⁾.

この paragraph は 4 つの文から成立っているので、先ずこの 4 つの文を切離し、それぞれの文の中で subject と predicate を見つけ出す。そしてそれら以外の modifier 等は一応出来るだけ無視してこの 4 つの文の骨格だけを浮かび上らせるようにする。そうすればそれらは大体次のように単純化されてしまうであろう。

1. The big boats are not the strangest objects.
2. (Even) more remarkable are the bait-baskets.
3. They might be mistaken for habitations or huts.
4. (Then) you see (great) wooden anchors, iron anchors, (prodigious) wooden mallets, and (various) other implements.

この 4 つの文をつなぎ合わせて読むだけで、原文全体の summarization は殆んど可能である²⁸⁾。これに理解出来る範囲内で modifier をつければ、summarization は更に適確になっていくであろうし、わからない単語があっても互いに意味を相補って学習者の理解を助ける。例えば ploughshare はその形状が anchor と似ていなければならず、又 mallet は used for driving stakes でだいたい想像はつく。

このような summarization の方法を身につけるということは恐らく extensive reading の最も基本的な technique の一つであろうと思われる。訳読式とは全く異なった reading attitude を要求されるだけに、学習者を summarization に習慣づけようと試みるためにはさまざまな工夫と練習が要求されるであろう。以下そのような試みのために考えられるいくつかの類似の方法を挙げてみたい²⁹⁾。

a. Choosing the best general statement:

これは 1 つ又は 2 つ以上の paragraph を読ませて、その内容を最も適確かつ包括的に表現している文をえらばせる方法である。ある 1 つのまとまった英文を読ませて、その題目をいくつか与えた中からえらばせる方法もこの type に属するであろう。general statement をえらばせる場合には、題目の代わりに the best general statement を含んだいくつかの文をあらかじめ用意しておかなくてはならない。次に示すのはその一例である。

Reading :

If a broad-minded modern scholar were to turn the clock back some seven hundred years and find himself in Paris at the middle of the Thirteenth Century, his first sensation would be delight at the intensity of intellectual activity. The scholars were the men of the hour. The church governed most of the activity of the city, and its leaders were men whose thoughts were among stars. The most promising road to fame led through the university, and this road was open to all. From the ends of Europe they gathered. If a monastery, cathedral school, or the court of a distant noble produced a young man with promising intellect, he'd be provided with funds, books, and letters of introduction and shipped off to Paris for the glory of learning and the reputation of his province. The political conflicts of the feudal world were heard at Paris as only a distant rumble. The scholars walked two by two along the banks of the Seine, thinking high thoughts and living in a paradise of intellectual detachment³⁰⁾.

Answers :

1. Intellectual activity was the dominant note in the Thirteenth Century.
2. The church governed most of the activity of Paris during this period.
3. Intellectual activity in Paris was hampered by the political conflicts of the feudal world.
4. Education in the Thirteenth-Century Europe was for the masses.
5. Scholars walked two by two along the banks of the Seine, living in a paradise of intellectual detachment.

b. Asking questions :

Paragraph によつては best general statement をえらばせる代りに, paragraph の内容そのものを答えとする最も適当な質問をえらばせることも出来る。この場合も質問を予めいくつか作っておくのであるが, このような準備なしに, 口頭又は筆答で, 最も適当と思われる質問を1つ作らせてみるのもよいであろう。

Reading :

The child is not just young—it is not simply a matter of his having lived a shorter time than the adult. The fact that we should always keep in mind in considering children is that they are in complete beings, that they are growing and developing, that they are men in the making, and the making is a very active process. Roughly speaking, this activity is in inverse ratio to the age of the child. For example, there is a greater difference between a child of five and one of two than there is between a child of five and one of eight. Again, there is a greater difference between a child of ten and one of fifteen than between a man of thirty and one of forty. These differences express themselves not so much in variations of size or form but most distinctly in function, that is, in the varying ability of the individual to adapt himself to his environment. In short, the most marked difference between the child of three and that of five, and the child of five and

one of eight, lies in the capacity for social adaptation of each one, and this is equally true all the way along the ladder of years³¹⁾.

Question :

1. Can the young child properly be thought of as a miniature adult?
2. What are some of the salient characteristics of the growth of children?
3. What stages of growth are marked by the most rapid change?
4. What is the most significant difference between a child of eight and one of five?
5. Is learning involved in what is meant by child growth?

c. Graphical representation :

summarization の変形とも言えるもので、口頭で述べたり、書いたりすることの代りに図示させる方法である。例えば地形、家屋の構造、物の形など。次のような文の場合に適用出来るであろう。

Example :

Hamaguchi's big thatched farmhouse stood at the verge of a small plateau overlooking a bay. The plateau, mostly devoted to rice culture, was hemmed in on three sides by thickly wooded summits. From its outer verge the land sloped down in a huge green concavity, as if scooped out, to the edge of the water : and the whole of this slope, some three quarters of a mile long, was so terraced as to look, when viewed from the open sea, like an enormous flight of green steps, divided in the center by a narrow white zigzag—a streak of mountain road. Ninety thatched dwellings and a Shinto temple, composing the village proper, stood along the curve of the bay ; and other houses climbed straggling up the slope for some distance on either side of the narrow road leading to the Choja's home³²⁾.

d. Matching sentences :

One paragraph 又は一定の長さの文を与え、意味の上からそれに接続するような英文を、いくつか与えられた中から一つえらばせる。えらばせるために準備する英文の長さや数は reading のレベルに応じて適当に定める必要がある。

e True-false および Multiple-choice :

読ませた英文の内容に関する statement を与え、それが正しいかどうかを答えさせたり、内容に関する質問のいくつかの答えの中から、正しいものをえらばせる方法である。これについてはあらたに説明をつけ加えるまでないであろう。あらゆる種類の英文に対して、内容に関する理解力を強めるような extensive reading の方法を促すために、この方法は利用し易い。

5. 結 語

筆者は、わが国における英語学習の目標として普通考えられている4技能 (hearing, speaking, writing, reading) の習得の中、学習者の事情による特殊な場合を除いて、reading ability が最も重要視されるべきであるという意見を持つている。Hearing, speaking, writing を軽視してもよいという意味では決してないが、日本語を母国語とする学習者が英語を学ぶ際のさまざまな客観的条件を考えてみても、reading を中心とした学習法にもっと関心が持たれて然るべきではないかという気がするのである。もっともここでいう reading とは interpretation の意味で translation ではない。すなわち本来在るべき姿での reading である。

Jespersen は「言語学習の最も高い目的は、外国民及びその文学・文化、一口にいえば最も広い意味におけるその国民精神の最もよき思想や制度に接することである」³³⁾と云っている。このような目的のためにも reading は最も大切な手段であらねばならない。そして又当然のことながらこのような目的のためには extensive reading の能力が要求される。本稿で述べて来たことも、このような extensive reading への一つのアプローチを motivation を手掛りにしてこころみたものにほかならない。

英語の知識は、速く読めることによつてはじめて使・い・も・の・に・なるとよく言われる。Extensive reading は結局は使・い・も・の・に・な reading のもっとも代表的な形であるわけであるが、そのためにも reading speed は重要な要素として学習課程で十分に考慮されなければならないであろう³⁴⁾。薄っぺらな本1冊を、一字一句辞書に頼りながら半年も1年もかかってやっと読み上げるといふ reading の方法が(そのような方法も重要であるには違いないが)、英語学習の全課程で何時までも行なわれていることの少なくない今日、extensive reading の重要性を改めて強調しておくことは無駄ではないと思われる。

(注)

- 1) 欧米における学校教育で外国語としてのラテン語学習が、少なくとも今世紀に入る頃までは、教養だけではなく、精神修養的な要素が強かったことは否定出来ないであろう。Iona and Peter Opie の *The Lore and Language of Schoolchildren* には、ラテン語を学ぶ生徒の次のような“epithet”が示されている。

Latin is a subject
That no one enjoys,
It killed the ancient Romans
And now it is killing boys.

- 2) この点に関して R. Lado は言語そのものに対する本質的興味 (Intrinsic Interest) をいかに維持し強化するかということが特に学習の初期の段階において重要であることを述べ、その方法について若干の suggestion を与えている。R. Lado, “Maintaining Interest”, *Selected Articles from Language Learning*, Series 1 pp. 59-61.

- 3) 坂本一郎ほか、言語心理学, p. 81.

教育上子供の興味を重視すべきであるとの思想は、ルソーやペスタロッチによって叫ばれ、ヘルバ

ルトに至って彼の教育学の中に体系づけられた。しかし波多野完治氏はこのヘルバルトの興味を二つに分け、自分の持っている goal に内在している balance (inducing power) を motivation と名づけ、goal に外在的なものを interest であるとしている。そして、例えば、文法の授業を面白くしようとして先生が、しゃれやじょうだんをまじえながら講義したとすれば、これは興味にうったえたのであり、生徒に外国語学習をとおして文法の意味をわからせておいて説明したとすれば motivation にうったえたことになるという。波多野完治、現代の言語心理学、牧書店、昭和32年、p. 233 参照。

- 4) 波多野完治、同上書、p. 233.
- 5) J. N. Hook, *The Teaching of High School English*, The Ronald Press Company, Now York, 1950, pp. 66-70.
- 6) D. P. Ausubel, *The Psychology of Meaningful Verbal Learning*, Grune and Stratton, Inc., New York, 1963, pp. 211-212.
- 7) 東京都立九段高校英語科, “読むことの指導と役立つ英語” 英語教育, 大修館書店 1962年4月号, p. 51.
尚 Vocabulary Test についてはアメリカでいろいろな種類のもが考えられているが、英語を外国語として学ぶ者にとっては程度が高過ぎるのが難点である。その中次のものは比較的使い易いのではないかと思われる。William Morris, *It's Easy to Increase Your Vocabulary*, Harper and Brothers., New York, 1957, pp. 5-8.
- 8) Albert J. Harris, *How to Increase Reading Ability*, Longmans Green and Co., Ltd, London, 1961, p. 197.
- 9) Albert J. Harris, 同上書, p. 199.
- 10) 中村敬, “語学教育と背景の知識の問題”, 英語教育, 大修館書店 (Vol. XII, No. 4) 1963年7月号, p. 12.
- 11) Jonathan N. Leonard, *Crusaders of Chemistry*, Doubleday, Doran and Co., Inc., New York, 1930, p. 143.
- 12) この連想の作用を特に重要視したのは Sweet であった。彼は言語の学習は連想の養成であると次のように述べている。
The whole process of learning a language is one of forming associations. When we learn our own language, we associate words and sentences with thoughts, actions, events. Sweet: *The practical Study of Languages*, p. 103.
- 13) Lafcadio Hearn, *My First Day in the Orient* より。
- 14) 例えば国語の試験問題などで、文章の一部を空欄にしてそれを埋めさせるものがあるが、この種の問題の場合、その日本語が相当高度のものであっても、それを読む者は正確な意味内容の語句を挿入することを期待される。
- 15) 例えばわが国で用いられている高等学校の英語教科書を検討してみても、O. Henry に次いで多く採られている作者は Hearn であって、Mujina, The Village Hero, Kusahibari 等が多数の教科書に出ている。しかも O. Henry の作品の方は、読み易いように殆んど例外なく多少の書きかえが為されていることを考えれば、教科書編集者の意図している所も、ここで述べているような所にあると言えよう。葉山茂, “高校教科書の内容研究”, 英語教育, 大修館書店 (Vol. XIII, No. 1) 1964年4月号, pp. 51-52 参照。
- 16) 例えば reading の際の眼球の動かし方, eye spans の問題など reading speed を上げるためには非常に重要であるがここでは割愛する。
- 17) この点に関しては Harris も次のように述べている。
The ability to recognize words quickly and accurately is fundamental to success in reading. This is so obvious that for many centuries teachers of reading were preoccupied mainly with the teaching of word recognition. Albert J. Harris, 前掲書, p. 315.
- 18) 但しこの Context による方法にあまり頼り過ぎることは弊害をもたらす、と Harris は次のように言う。
As with other techniques, the use of context is valuable, but can become a handicap if the child learns to rely on it too heavily. Albert J. Harris, 前掲書, p. 317.
- 19) 平井昌夫, 語い指導, 明治図書出版, 1962年, pp. 60-70 参照

- 20) Stroud et al. *Improving Reading Ability*, Appleton-Century-Crofts, Inc., New York, 1956, p. 33 参照。
- 21) Russel G. Strauffer, "A Study of Prefixes in the Thorndike List to Establish a List of Prefixes that Should be Taught in the Elementary School" *Journal of Educational Research* 35 (February, 1942) p. 445.
- 22) James I. Brown and Eugene S. Wright, *Manual of Instruction for Use with the Minnesota Efficient Reading Series of Tachistoslides*. Keystone View Company, Meadville, Pennsylvania, 1957,
- 23) Paul Mckee, *The Teaching of Reading in the Elementary School*, Houghton Mifflin Company, Boston, 1948, p. 200.
- 向アメリカの小学校での実験では、Vocabulary を増大させるための勉強方法として、synonym や antonym の記憶を強調し word lists を使わせるやり方が、いろいろの方法の中で一番効果があったという報告がある。Marguerite Jenkins, "Vocabulary Development: A Reading Experiment in Seventh Grade English". *Peabody Journal of Education*, 19 (May, 1942) pp. 347-351 参照。
- 24) Jespersen: *How to Teach a Foreign Language* p. 16. 飯野至誠, 英語の教育, 大修館書店 1960, p. 49 参照。
- 25) 犬養健, "父犬養毅を憶う,, 中央公論, 昭和7年8月号所載。
- 26) J. B. Stroud et al. 前掲書, pp. 77-78.
- 27) Lafcadio Hearn, *At Yaidzu* より。
- 28) 短文に慣れた眼で長文の extensive reading 用教材に接する場合には心理的負担又は抵抗が感じられるであろうことは想像に難くない。従ってこのような summarization のための方法へ導入する一つの過程として、例えば次のような同じ story でも (A) の形を (B) の形で読めば心理的抵抗が少なくなることを理解せしめておくことも考えられる。
- (A) One day a young frog said to its father, "Father, I saw a very big animal this morning. It was much bigger than you". The old frog said, "That was White's horse". I can make myself as big as the horse". The old frog started to blow himself out.
- (B) 1) One day a young frog said to its father.
 2) "Father, I saw a very big animal this morning".
 3) "It was much bigger than you".
 4) The old frog said.
 5) "That was White's horse".
 6) "I can make myself as big as the horse".
 7) The old frog started to blow himself out.
- 29) 武本昌三, "Reading の指導法について" 英語教育, 大修館書店, Vol. XII, No. 4) 1963年7月号, pp. 14-17 参照。
- 30) Jonathan N. Leonard, 前掲書, p. 81.
- 31) Austen Fox Riggs, *Intelligent Living*, Doubleday and Co., Inc., New York, 1929, p. 81.
- 32) Lafcadio Hearn, *A Living God* より。
- 33) Jespersen: *How to Teach a Foreign Language*, p. 9., 飯野至誠, 前掲書 pp. 2-3 参照。
- 34) この reading speed の問題は extensive reading の場合特に重要であることは言を俟たない。普通 oral reading の speed は教育ある米英人で一分間 130 語から 180 語である。このことより日本の学生を指導する場合の目標は、一分間 130 語程度とするのが適当と言えるかも知れない。しかしこれは一応最終目標として、大学生の場合は一分間 120 語、高校生は 100 語、中学校は 80 語程度の目標をたてるのが無難のように思われる。又 silent reading の速度は、教育のある米英人で一分間 250 語から 300 語である。しかし訓練によっては最低 500 語から 1000 語に達すると言われている。日本の学校教育における最高目標を一応 250 語とすると、普通は 150 語から 200 語程度の speed が妥当であると思われる。小川芳男, 英語教育法, 国土社, 1963年, pp. 61-62 及び Stroud et al. 前掲書, p. 3 参照。